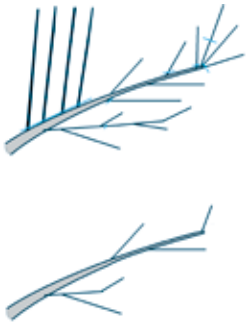
しまなみ農業だより

モモとカキの剪定のお話し

節分を控え1年でもっとも寒い時期を迎えました。この頃は果樹類、特に落葉果樹のせん定時期を迎えます。平成19年2月号で、落葉果樹類の大まかなせん定方法が述べられておりましたが、今月号では特にモモとカキを使って、せん定時に気をつけることを述べるとともに、樹種による結果習性の違いを解説します。

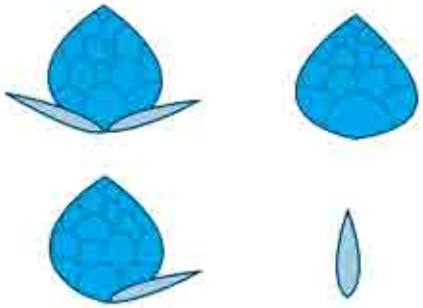
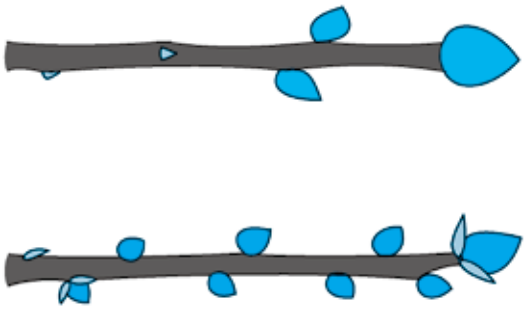
カキの場合

カキの花は、新しく芽吹いた新梢の基部近くの数節に着生します。花を持った芽は大きく丸い形をしており、花を持たない芽は小さく三角形にとがっています。カキの枝梢をよく観察してみると、花を持った大きく丸い芽は、昨年伸びた新しい枝の先端部数節にのみ見られます。つまり、枝先をすべて切り飛ばしてしまうと、花を持った芽をすべて除去してしまうことになるので、果実が1個も成らないことになります。もう一点。側枝には天に向かって勢い良く伸びた枝（徒長枝）と、やや弱く横向きに生えた枝とがあり、花芽を持っているのは後者で、徒長枝には先端部にもまず花芽はありません。そこでせん定は間引きを基本とし、徒長枝は原則すべて除去、水平方向に発生した短めの枝で花芽を確認しながら適当に配置するように残し、これらはなるべく触らないようにします。



モモの場合

モモは花芽と葉芽がはっきり分かれており、大きく丸い芽が花芽、その脇にあるとがった細い芽が葉芽です。モモの枝を観察してみると、カキとは違ってほとんどが大きく丸い芽です。春の満開時には枝にびっしり枝に花が咲くゆえんであります。では葉芽は？枝の基部から中央部にかけて、ところどころに葉芽とセットになった葉芽、あるいはまれに葉芽だけの場合がポツリポツリとあります。それと原則として枝の最先端には葉芽があります。モモの場合はカキと違って葉芽を確認しながらの作業となり、枝の切り返し時には必ず葉芽が天を向くように切ります。もう一点注意事項。先端の芽の方が萌芽しやすいという樹木一般の原則がモモにも当てはまりますが、モモの場合発芽しなかった芽はそのまま消え去ってしまうことが多く、2年目以降に発芽することはまれです。そのためモモの枝を長く残すと、発芽部が先へ先へと逃げてしまい、基部が禿げ上がった状態となります。カンキツなどでは禿げ上がった長い枝を切り返しておくと良く発芽しますが、モモでは発芽せず逆に枯れこんで樹勢衰弱や病気の原因にもなります。そのためモモは切り返しが基本。特に側枝上の基部に近い長い枝は、なるべく基部に近い上向きの葉芽のところで切り返し、新梢発生部を基部に近いところに残すように心がけます。側枝の管理もあまり長く伸ばしすぎないようにします。長さが30㎝程度の枝（中果枝）、10㎝程度の枝（単果枝）は、良い結果母枝となるのでなるべく残しておいた方が良いでしょう。



専門的にはカキの花芽の付き方（結果習性）を、混合花芽（Ⅱ）が頂腋生する、モモの場合は純正花芽が腋生する、と表現します。